巻頭言

オリンピック年に想う、スポーツ界の男女共同参画

国枝（くにえだ）　タカ子

女性のからだ（身体）は美しい。アテネ・オリンピックは「動く身体の輝き」と「不屈の魂」を見せてくれると同時に、女性たちの「多様なからだのあり方」を世界中に示してくれるだろう。

1896年第１回オリンピック大会開催以来百余年の歴史を見ると、日本女性が本格的に活躍し始める時期は遅く、ベルリン大会（1936年）以降である。それ以前のアムステルダム大会（1928年）には、人見絹枝がただ一人で出場し銀メダルをとったが、彼女はわずか24歳で没している。短く美しい輝きが痛々しい。彼女が闘い敗れたのは、当時の家父長制支配の色濃い校長会議の無理解とスポーツ支援体制の貧弱さが大きな原因だった。女性が激しいスポーツをすることは産む身体に有害とする見識が強く、女性がさまざまな競技を体験することさえ難しかった時代である。その著書『戦ふまで』（1929年 三省堂）には、人見が流した血の汗が記録されている。

現代の女性トップアスリートたちは、国や各種競技団体や後援会のサポートを受けて練習しており、医科学チームの協力や用具メーカーの助力（例えば個別の靴作りや水着デザインなど）も大きい。応援を申し出る男性監督やコーチも飛躍的に増えた。しかし時代を超えて変わらないのは、引退後の職業もままならないなど彼女たちが“使い捨て”にされがちになることである。彼女たちを育成した男性監督やコーチが競技団体の役員を独占する一方で、女性たちは自己犠牲を強いられ、ときどきは“刺身のつま”や“花”を演じることになる。

こういう現状に目を背けず、スポーツ界の「男女共同参画」を目標としたいものである。日本のスポーツ･ウーマンは、女性選手たちを“しごく”ことで功績を上げてきた男性指導者に依存するのではなく、自立し積極的に組織運営するアスリートに成長していかなければなるまい。そのために何より大切なことは、女性全体がスポーツを自分たちの文化から疎外することなく、自らの活動の一部として市民権を与え、これを支援するムーブメントをつくっていくことであろう。

■プロフィール　1944年東京生まれ。茨城大学教育学部助教授(体育学)、国際女性スポーツ学会会長、日本オリンピック・アカデミー理事、日本学術会議第19期文化人類学民俗学研究連絡委員会委員（舞踊･身体表現専門）。女性とスポーツについて広く研究を行うほか、女性と仕事の未来館「オリンピックと女性－百年」展の企画制作（2004年）などを手がける。著書『近代日本女性体育史』（1981年）など。